

児出生後の追跡調査の諸問題(追跡調査率について)

(分担研究:保健指導班HTLV-I抗体陽性妊婦から生まれた児の指導と管理)

土居 浩、辻 芳郎

要約:1987年8月より長崎県で行われているATL prevention program Nagasaki,1987 (APP Nagasaki,1987)における出生児の追跡調査状況を検討した。その結果長崎県では妊婦の60~70%がHTLV-I抗体スクリーニングを受けておりキャリアと判定された妊婦の90%以上が人工栄養を行っているとは推定された。また、キャリア妊婦より出生した児の24ヶ月時の補足率は約40%と推定された。

見出し語:APP,Nagasaki1987、追跡調査

研究方法:1987年8月より長崎県で行われているATL prevention program Nagasaki,1987(APP Nagasaki,1987)では児出生時に各産科より長崎大学に出生連絡が行われている。今回この出生連絡を基に長崎県下のキャリア妊婦よりの出生した児の紹介状況、17追跡小児科病院への紹介状況を調べた。さらに、紹介を受けた児が実際に追跡病院を受診しているかどうか調べるため当科外来への紹介状況と生後6ヶ月時の実際の受診状況を比較して受診率と選択した栄養方法について検討した。またAPP,Nagasaki 1987開始以前に行っていた出生児の追跡調査から2才までの追跡調査率を併せて報告する。

結果:

1. 各年度および地域別出生児紹介状況

国立長崎中央病院、上対馬病院、厳原病院のデータは国立長崎中央病院で集計するため把握できていない(年間50人前後と推定される)がそれらを除いた各年度の出生児の紹介状況を見ると平均して年間450~500人が紹介を受けている。

	前期 (1~6月)	後期 (7~12月)	計
1987年	-	167*	167
1988年	213	252	465
1989年	235	-	235

*8~12月

長崎大学医学部小児科

2. 指定病院別患者紹介数

(1987年8月～1989年6月)

各地域別の紹介状況は指定病院小児科での紹介状況は1988年以降は比較的一定している。紐差病院、川棚病院には産科がなくこの地区の分娩の多くは佐世保地区で行われている事から紹介数が少ないと思われる。大村市立病院は情

	87.8-12	88.1-6	88.7-12	89.1-6
① 平戸市立紐差病院	0	0	2	1
② 北松中央病院	5	11	10	14
③ 佐世保総合病院	20	40	41	38
④ 佐世保共済病院	0	24	27	23
⑤ 国療 川棚病院	1	3	2	1
⑥ 大村市立市民病院	1	0	2	7
⑦ 国立長崎中央病院	—	—	—	—
⑧ 健保諫早総合病院	18	35	28	32
⑨ 長崎市立市民病院	9	18	25	14
⑩ 長崎大学	74	63	89	83
⑪ 五島中央病院	19	10	12	10
⑫ 上五島病院	3	1	3	12
⑬ 奈留病院	1	0	1	0
⑭ 生月病院	1	0	0	2
⑮ 上対馬病院	—	—	—	—
⑯ 厳原病院	—	—	—	—
⑰ 志岐公立病院	1	3	5	2
不明	14	5	5	8

3. 長崎大学医学部小児科における出生児紹介状況と受診率

1987年8月1日～1989年2月28日の18ヶ月の間に生まれた児で当科受診予定と紹介された者は250人であった。生後6ヶ月、すなわち1987年8月1日～1989年8月31日の期間に実際に当科外来を受診した児は147人で紹介予定者の58.8%であった。受診予定者と実際の受診者の栄養方法を比較すると受診予定者では250人中人工栄養児230人(92.0%)母乳栄養児19人(7.6%)不明1人(0.4%)で高率に人工栄養を選択していた。実際に受診した児147人中人工栄養児は143人(97.3%)、母乳混合栄養児は4人(2.7%)で人工栄養児はさらに高率であった。

報の不徹底があり1989年になって追跡調査が行われるようになった。また、生月病院、奈留病院など離島地域の小さな病院では受け持っている追跡児数も多くはないがそれ以上に紹介数が少なかった。

4. 長崎大学医学部小児科における月齢別追跡率

1985年6月～1987年7月の期間にキャリア母親より出生した児で生後6ヶ月に当科を受診した163人の人工栄養児についてその後の追跡調査状況を調べた。これらの児の生後12ヶ月以後の受診については当科より受診案内の葉書を郵送した。生後12ヶ月では163人中146人(89.5%)、18ヶ月では138人(84.7%)、24ヶ月では118人(72.4%)が当科を受診し比較的良好な受診率を示した。

月齢	受診児数	(%)
6ヶ月	163	(100)
12ヶ月	146	(89.5)
18ヶ月	138	(84.7)
24ヶ月	118	(72.4)

考案：APP, Nagasaki 1987では妊婦スクリーニング数についての情報はシステム上得られない。長崎県の年間分娩数は約20000人、妊婦キャリア率3.5～4%とすると年間700～800人の児がキャリア妊婦から出生していると考えられる。実際の紹介数は年間450～500人で逆算すると全県下の妊婦の60～70%がHTLV-I抗体スクリーニングを受けていると推定される。長崎県では地理的条件から17の追跡病院小児科を配置したが離島地域の小さな病院での紹介数は予想より少なかった。人口の少ないこれらの地域では病院の職員自身が顔見知りであるなど個人のプライバシーが保たれにくい状況にあり地域外の病院の紹介を受ける場合も多いことなどが原因と考えられる。

児の追跡調査状況では実際に受診した児は紹介数の約60%に留まった。特に母乳栄養を選択した19人の内4人のみが実際に受診したに過ぎず今後母乳混合栄養児の順行的な追跡調査を行うことは困難と思われた。栄養方法の選択では受診予定者で92.0%、実際の受診者で97.3%が人工栄養を選択しておりHTLV-I抗体検査を受けた妊婦でキャリアと判定された場合の人工栄養の受け入れは良好であった。

当科では児の追跡調査に当たって①生後6ヶ月に受診した児には乳児検診案内の葉書を定期的に送付する。②来院時に採血だけでなく乳児検診・育児相談を行う。③結果の連絡はプライバシー保護のため郵送ではなく電話で母親本人を確認した後行い、場合によっては逆に母親から電話してもらう。ことを原則とし個々の状況に応じて対応している。追跡調査率は生後6ヶ

月で当科を受診した児のその後の追跡調査は転居などにより徐々に減少したが生後24ヶ月でも72.4%が受診していた。紹介予定者の実際の受診率から単純計算するとキャリア妊婦より出生した児の24ヶ月時の補足率は約40%と推定された。

現時点では出生児追跡調査で特に大きな問題は起こっていないが人工栄養の導入が疾病や身体発育や母子相互関係などに対する影響注意深く見守る必要がある。また実際に受診した母親の多くは児の疾病や身体発育などに不安を抱いており小児科医としてきめ細やかな助言や指導が必要である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1987年8月より長崎県で行われている ATL prevention program Nagasaki,1987(APP Nagasaki,1987)における出生児の追跡調査状況を検討した。その結果長崎県では妊婦の60~70%がHTLV-1抗体スクリーニングを受けておりキャリアと判定された妊婦の90%以上が人工栄養を行っていると推定された。また、キャリア妊婦より出生した児の24ヶ月時の補足率は約40%と推定された。